



『後漢書』 「儒林伝 下」 訳注

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-12-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 湯城, 吉信, 矢羽野, 隆男, 山口, 澄子, 釜田, 啓市 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24729/00007754 |

『後漢書』 「儒林伝 下」 訳注

本稿は、『大阪府立工業高等専門学校研究紀要 第三十卷』（平成八年六月発行）に掲載した「『後漢書』「儒林伝 上」訳注」を承けて、『後漢書』「儒林伝 下」に注釈を加え現代語訳したものである。

『後漢書』儒林伝全体の構成について、既に発表したように、「儒林伝 上」は、後漢一代の儒学の盛衰を概観する後漢儒学簡史の性格を持つ「序」、それに続く『易』『書』を伝授した学者の伝記から成る。一方、「儒林伝 下」は、『詩』『礼』『春秋』を伝授した学者の伝記、そして「儒林伝」全体を総括する「論」「贊」から成っている。

「序」「論」「贊」には范曄の思想が直接に述べられている。彼は、『後漢書』の自序とも言うべき「獄中與諸甥姪書」の中で自著『後漢書』の出来栄えに対する自信を重ねて述べているが、とりわけ「序」「論」「贊」には巧みな文章表現と士大夫としての倫理的歴史観とが十分に発揮されている旨を誇らしく記している。例えば、「循吏伝」より以下の諸伝（「儒林伝」もその一つ）の「序論」については「筆勢縦放、実に天下の奇作」であり賈誼の過秦論や班固の作品にも劣らぬといひ、「贊」には「吾が文の傑出にして殆ど一字として空しく設けたるは無し」と自負する。また「論」も「以て〔後漢〕一代の得失を正す」ことを意図したものである。

「序」「論」「贊」に述べられた范曄の思想、それを「儒林伝」の「論」に即して一端を挙げる。例えば、「その衰退の由来をたずねるに、「弱体化した後漢王朝が」長い年月を持ちこたえられたのは、どうして学問の功德でないと言えようか」との言葉がある。ここには、儒学の持つ倫理的価値を宣揚せんとする范曄の儒学観が看取できる。

一方、「序」「論」「贊」に対して、個々の学者の伝記は、范曄の儒学観の具体的な群像であるといえるだろう。後漢の儒学を主題とする一まとまりの伝

を構成する際に范曄に浮かんだ思い・イメージ、それを論理的言辞によって直接に表現したものが「序」「論」「贊」であるとするれば、各伝は個人の行動の記録の形態をとりつつ全体として范曄の抱く儒学像を反映したものと見えよう。

以上、「儒林伝 上・下」の訳注を一通り終えるに当たり、一篇全体の構成とその構成のもつ意味を付言した。

なお、以下の訳注部分は、基本的に左記の如く四人に担当箇所を配当し、各自が作業を進め、一通り訳注を終えた後に会合し検討を加えて成ったものであり、各分担箇所の文責はその担当者に在る。

冒頭　↳ 召馴伝……釜田啓市
楊仁伝↳ 孫堪伝……湯城吉信
鐘輿伝↳ 顔容伝……山口澄子
謝該伝↳ 末尾……矢羽野隆男

『後漢書』列伝卷七十九下「儒林伝 下」現代語訳注

【詩】

『漢書』に言う。魯人の申公は、詩を浮丘伯より伝授され、注釈を作った。これが魯詩である。齊人の轅固生もまた、詩を伝えた。これが齊詩である。燕人の韓嬰もまた、詩を伝えた。これが、韓詩である。三家はどれも、博士官に立てられた。趙人の毛萇も、詩を伝えた。これが毛詩であるが、まだ（博士官

* 湯城吉信
* 矢羽野隆男
*** 山口澄子
*** 釜田啓市

には立てられていない①。

①『漢書』「儒林伝」にほぼ同内容の記事がある。

高詡、字は季回、平原・般(山東省)の人。曾祖父の嘉は、魯詩を元帝に伝授した。仕官して上谷(河北省)の太守にまでなった。父の容は若い頃より嘉の学を伝え、哀帝・平帝(紀元前七〇紀元四)の時代に光禄大夫(宮内の顧問役)となった。

詡は、父が高官であったため、郎中となった。代々、魯詩を伝えた。信義ある行いと清廉潔白な性格であることとで名を知られていた。王莽が帝位を篡奪すると、父子は盲人と称して逃げ、王莽には仕えなかった。光武帝が即位すると、大司空の宋弘は、詡を推薦し、召して郎とし、符離(安徽省)の長に任命した。官を辞し、その後、召されて博士となった。建武十一年(三五)、大司農(穀物を司る)に拜された。朝廷にあつては、方正であると称賛された。十三年(三七)、在職中に亡くなった。金銭と墓地とを賜った。

包咸、字は子良、会稽・曲阿(江蘇省)の人。若いときに諸生となり、長安で学業を受け、博士の右師細君に師事し、魯詩・論語を学んだ。王莽の時代の末期に「都を」去り、故郷に帰る途中、東海(江蘇省)の境界で、赤眉賊に捕らえられ、そのまま拘束された。十余日間、咸は昼夜、経を暗唱して落ち着いていた。賊は「咸を」ただ者ではないとして、釈放した。そこで、「咸は」東海に住み、校舎を立て、講義を行った。光武帝が即位して、やっと故郷に帰った。太守の黄讜は戸曹史(民戸を司る)に任命した。咸を召し、家に来て息子に「学を」授けさせたいと思つた。咸は「礼には、師のもとに」来て学ぶというのがありますが、「師のほうに」往つて教えるということはありません(『礼記』「曲礼」と言った。讜は、そこで子を行かせ、咸を師とさせた。

孝廉(選挙の一つ)に推挙され、郎中(近侍の一つ)に任命された。建武年間(光武帝 二五〇五五)、[宮廷に]入り、皇太子に論語を授け、また、その章句(注釈の一種)を作った。諫議大夫(天子を規諫する)・侍中(近侍の一つ)・右中郎将(宿衛を司る)に拜せられた。永平十五年(六二)、大鴻臚(外国の賓客を接待する)に遷った。[皇帝に]進見するたびに、几杖を賜り、屏に入つても小走りせず、事を賛するときも名を言われなかつた。[皇帝が経伝を学んでいるとき]経伝に疑問点があれば、そのたびに小黄門(侍従の一つ)

を「咸の」宿舎へ行つて質問させた。

顕宗(明帝)も、咸に師傳の恩があり、「咸が」平素より清貧で苦しいため、いつも特別に賞して珍玩束帛を与え、俸禄も諸卿よりも多くしたが、咸は全部ばらまいて、学生の貧しい者に与えた。病気が重くなつたとき、帝は自ら輦駕に乗つて見舞いにやつてきた。八年(六五)、七十二歳で、在職中に亡くなった。

子の福は、郎中に拜せられ、また、「[宮廷に]入り、論語を和帝に授けた。

魏応、字は君伯、任城(山東省)の人。若いときより、学問を好んだ。建武(二五〇五五)の初め、博士のもとへ行き学業を受け、魯詩を学んだ。家に閉じこもり、暗唱して復習し、同学と交際しなかつた。京師はこれを称賛した。その後、帰郷して郡吏となり、明経に推挙された。済陰王の文学に任命された。病気のため免官され、山沢で教授すると、学生の数は、常に数百人いた。永平(明帝 五八〇七五)の初め、博士となり、また遷つて侍中となった。十三年(七〇)、大鴻臚(外国の賓客を接待する)に遷った。十八年(七五)、光禄大夫に拜せられた。建初四年(七九)、五官中郎将に拜せられた。詔があり「[宮廷に]入り、千乘王の仇に「学問を」授けた。

応は経学に明るく、行いもすぐれていた。弟子のうち、遠方より来た者もあり、記録されている者は数千人いた。肅宗(章帝)は、非常に魏応を重んじた。しばしば、進見して、御前にて議論し、特に賞賜を受けた。当時、「帝は」京師の儒者達を白虎觀に集め、五經の同異を講論させた。応にはもつぱら難問を担当させ、侍中の淳于恭が、それを上奏した。帝は自ら臨み裁決を下した。石渠の故事のとおりであった。翌年、「都より」出て上党(山西省)の太守となった。召されて騎都尉(固定された義務はない。普段は侍衛武官)となり、在職中に亡くなった。

伏恭、字は叔斉、琅邪・東武(山東省)の人。司徒の湛の兄の子である。湛の弟の黯、字は稚文、は奇詩に詳しかったため、章句(注釈の一種)を改定し『解説』九篇を作った。位は光禄勳(宮廷禁門を司る)にまで至つた。子がなかつたので、恭を後継とした。

恭は親孝行で、継母にうやうやしく仕えた。若いときより黯の学を伝えられ、「父が」高官であつたため郎となつた。建武四年(二八)、劇(山東省)の令

に任命された。政治を行うこと十三年、恵み深く公正な政治で名を知られた。青州（山東省）では、推挙され、特に有能とされた。太常が経を試験してみると、一番の成績であったので、博士に拜せられた。常山（河北省）の太守に遷った。大いに学校を興し、教授してやめなかった。そのため、北方では伏氏学を学ぶ者が多かった。永平二年（五九）、梁松に代わって太僕になった。四年（六一）、帝が辟雍に臨み、儀礼を行っていると、恭を拜し、司空とした。以前、父の黯の注釈が繁雑だったので、恭は贅言を削り、二十万言に定めた。位にあること九年、病気を理由に辞任を願い、退任した。詔があり、千石を賜った。「恭は」それをいただき、そうして一生を終えた。十五年（七二）、琅邪（山東省）に行幸したとき、「恭を」召し出したが、その待遇は三公の儀に準じていた。建初二年（七七）の冬、肅宗（章帝）が饗礼を行ったとき、三老とした。九十歳、元和元年（八四）に没した。墓地として顛節陵（明帝の御陵）のふもとを与えられた。

任末、字は叔本、蜀郡・繁（四川省）の人。幼いとき、斉詩を学んだ。京師に遊学し、十余年間教授した。友人の董奉徳が、洛陽で病没した。末は、そこで、自ら鹿車（鹿一匹を入れ得るほどの小さい車）をおし、奉徳の柩を乗せ、墓所へいった。これで、末は有名となった。郡の功曹となり、病気を理由に辞職を願い退任した。その後、師の葬儀に向かう道中に没した。死に臨んで、兄の子の造を戒めて「自分が死んだら必ず、私の遺骸は師の門へ連れていけ。もし、死んで知覚があれば、魂霊となっても恥じずにすむ。もし知覚がなければ、土にかえるだけだから。」といった。造はこれに従った。

景鸞、字は漢伯、広漢・梓潼（四川省）の人。若いときより、師に従い学んだ。七州の地を涉り歩き、斉詩・施氏易を習得し、あわせて河図洛書・図讖緯書を受け、『易説』及び『詩解』を作った。字句は河図洛書よりあわせ取り、類別整理し「た著作を」『交集』と名付けた。また、『礼内外記』を撰し、『礼略』と名付けた。また、風角雜書（古い書か）より選び、その占いと実例とを列挙し、『興道』一篇を作った。そして『月令章句』を作った。およそ、著述は五十余万言。しばしば上書して、災変を救うための術を述べた。州郡は召し出そうとしたが就任せず、寿命を完うして亡くなった。

薛漢、字は公子、淮陽（江蘇省）の人。代々、韓詩を学び、父子は注釈で有名であった。漢は、若い頃より父の学問を伝えられたが、とりわけ災異讖緯を説くのに優れていた。常に数百人の学生に教授した。建武（光武帝 二五〜五五）の初め、博士となった。詔を受け、図讖を校定した。世間の詩を言うものは、漢を推して、第一人者とした。永平年間（明帝 五八〜七五）、千乘（山東省）の太守となった。その政治は優れていた。その後、楚の事件①に罰せられ、辞任したが、連座して下獄され死んだ。弟子のうち、犍為の杜撫、会稽の澹台敬伯、鉅鹿の韓伯高が最も名を知られた。

①永平十三年（七〇）、楚王英が、図讖の書を造作し逆謀の疑いがあると上奏され、処罰された事件。翌年、英は自殺するが、調査がすすむにつれ、関係者が続出、数千人を死罪にするまでに発展した。

杜撫、字は叔和、犍為・武陽（四川省）の人。若いときより才能があった。学業を薛漢より受け、『韓詩章句』を定めた。その後、郷里に帰って教授した。落ち着き払っており、道を楽しんでいて、その行動は必ず礼に則っていた。弟子は千余人あった。その後、驃騎將軍で東平王の劉蒼に召された。蒼が国に就任すると、掾史はみな王官の属に任命されたが、また一年にもならないうちに、みずからを弾劾して帰ってしまった。当時、撫は大夫であったが、去るに忍びなかった。蒼はこれを知り、車馬財宝を与え、撫を去らせた。太尉府に召された。建初年間（章帝 七六〜八三）、公車令となったが、数力月のうち、在職中に亡くなった。撫の作った『詩題約義通』を、学者たちは伝え、これを『杜君法』といった。

召馴、字は伯春、九江・寿春（安徽省）の人。曾祖父の信臣は、元帝の時に少府となった。父は、建武年間（光武帝 二五〜五五）に卷（河南省）の令となった。おほかた、細かいことに拘らなかつた。

馴は、若いときに、韓詩を学んだ。博く書伝に通じており、志しが立派であることで知られていた。郷里のものは、馴のことを「徳行の恂恂たる（慎み深い）召伯春」と言った。何度も州郡に仕官した。司徒府に召された。建初元年（七六）、だんだんと騎都尉（固定された義務はない。普段は侍衛武官）に遷り、肅宗（章帝）に侍講した。左中郎將に拜された。「官廷に」入り、諸王に「学問を」授けた。帝王はその義学を良しとして、恩寵厚かつた。「朝廷より」

出て、陳留（河南省）の太守に拝され、刀剣・金銭・財物を賜った。元和二年（八五）、〔中央に〕入りて、河南尹となった。章和二年（八八）、任隗に代わって光祿勳となり、在職中に亡くなった。

孫の休は、位は青州（山東省）の刺史にまでなった。

楊仁、字は文義、巴郡閬中（四川省）の人。建武年間（光武帝 一五〇～五六）、師を訪ね『韓詩』を学んだが、数年で帰り、静かに暮らしながら教授した。郡に仕えて功曹（郡の属吏）となり、孝廉（举士科目の一つ）に挙げられ、郎に任命された。太常（宗廟礼儀を司る官）は仁を経中博士に昇格させようとしたが、仁は自ら年が五十に満たないことを理由に旧科に応じなかった（『漢官儀』には「博士は年齢が五十以上の者に限る」とある）ので、上府（役所）は代わりの人物を選んだ。

顯宗（明帝）は特別に召しだし、北宮衛士令（秩六百石の官）に任じた。引見して当世の政治について尋ねられると、仁は、寛和を宗とし賢人を採用し、驕慢な外戚を斥けることを急務とすべきだと答えた。また、便宜（やるべきこと）十二事を奏上したが、どれも当世の急務とすべきことであり、帝はそれを嘉みし、絹と錢とを下賜した。

帝が崩するに及び、当時〔明帝の後の〕馬一族が権勢を誇っており、争って後宮に入ろうとした。（王先謙は「北宮に入つて后に謁するを欲するなり」という。）仁は鎧を着、戟を持ち、門の警護を固めたため、敢えてみだりに入る者がなかった。肅宗が立ち、馬一族は仁が厳格すぎると讒言したが、帝はその忠なることを知っており、ますます嘉みし、什邡令に任命された。寛容な政治を行い、勸課の属官の子弟は悉く学びに来た。その経術に明らかな者は、右署（注に「上司」とある）に顕彰するか、あるいは朝廷に薦めるかした。これにより、義学（公衆のために設けた私立学校）が大いに興った。墾田は千余頃であった。兄の喪を行うため官を去った。

後、司徒の桓虞の役所に召された。属官に宋章という、食欲で贅沢の限りを尽くしている者がいた。仁は最後まで言葉を交わすことも席を同じくすることもなかった。当時の人はその正義感に畏敬の念を抱いた。後、閬中の令となり、在職中に亡くなった。

趙暉、字は長君、会稽山陰（江蘇省）の人。若くして県吏となった。命を受

けて督郵（郡守の補佐役）を迎えたが、暉は召使いになることを恥じ、遂に車馬を棄てて去った。犍為・資中（四川省）に至り、杜撫を尋ね『韓詩』を受け、その学を究めた。苦節二十年、家と音信を絶つて帰らなかったため、その家では死亡通知を発し喪服を着た。業を終えてようやく家に帰った。州が召して従事（属官）に任じられたが、就任しなかった。有道（举士科目の一つ）に挙げられた。在野で一生を終えた。

暉は、『呉越春秋』『詩細歷神淵』を著した。蔡邕は会稽に至り、『詩細』を読んで嘆息し、『論衡』に勝るとした。邕はこれを都に持ち帰り、学者はみな暗唱した。

当時、山陽の張匡、字は文通もまた『韓詩』を習い、章句（注釈）を作った。後、有道に挙げられ、博士に召されたが、就任しなかった。在野で一生を終えた。

衛宏、字は敬仲、東海（山東省から江蘇省にかけての地名）の人。若くして河南の鄭興と古文学を学んだ。

初め、九江の謝曼卿は『毛詩』を善くし、その訓義（注釈）をした。宏は曼卿から学を受け、『毛詩序』を作った。（詩序の作者については、子夏の作とするものなど諸説ある）善く風（国風）雅（大雅・小雅）の主旨を把握しており、今日に至るまで世に行われている。後、大司空の杜林から『古文尚書』を受け、『訓旨』（書名か）を作った。当時、濟南の徐巡は宏に師事し、後、林から学を受け、また名儒として世に知られた。これにより、古文学は隆盛し、光武帝は議郎（論議を司る官）にした。

宏は、『漢旧儀』四篇を作り、西京（長安）の雜事を載せた。また、賦や頌、誄七首を著し、みな世に伝わっている。

〔光武〕中興の後、鄭衆・賈逵が『毛詩』を伝え、後、馬融が『毛詩伝』を作り、鄭玄が『毛詩箋』を作った。

【礼】

『漢書』に「魯の高堂生、漢興り『礼』十七篇を伝う。」とある①。後、瑕丘蕭奮はそれを同郡の后蒼に授け②、蒼は梁人の戴徳及び徳の兄の子の聖と沛

人の慶普とに授けた。そこで徳は『大戴礼』を作り、聖は『小戴礼』を作り（現存の『礼記』だとされる）、普は『慶氏礼』を作り、三家はみな博士に立てられた。孔安国が献上した『礼』古経五十一篇^③及び『周官経』六篇は、前世（前漢）にはその書を伝えていたが、まだ名家（専門の学で名を得ている者）がなかった。「光武」中興以降、また大小戴の博士が置かれた。相伝して絶えなかつたとは言え、儒林に顕彰される者もいなかった。建武年間、曹充は慶氏の学を習い、その子の褒に伝え、かくて『漢礼』を撰述した。このことは、褒の列伝に見える。

①原文「漢興、魯高堂生伝『士礼』十七篇」。

②『漢書』には「孟卿が蕭奮に仕えて后蒼に授けた」とある。

③鄭玄『六芸論』に「後得孔子壁中古文礼凡五十六篇」とある。

董鈞、字は文伯、犍為・資中（四川省）の人。「慶氏礼」を習い、大鴻臚の王臨に仕えた。元始年間（平帝 一〜五）、明経に挙げられ、稟儀令に遷り、病氣を理由に官を去った。建武年間（光武帝 二五〜五六）、孝廉（举士の科目の一つ）に挙げられ、司徒の府に召された。

鈞は博く古今に通じており、しばしば政治について発言した。永平の初めに博士になった。当時、五郊の祭祀、及び宗廟の礼楽・威儀章服を創設したが、いちいち鈞に参議させ、「その意見は」多く採用された。世間では通儒と称された。昇進を重ね五官中郎将（官名。將軍に次ぐ。）にまでなり、教授する門下生は常に百余人いた。後、事件に連座し騎都尉に左遷された。歳七十余で、在野で一生涯を終えた。

「光武」中興し、鄭衆は『周官経』を伝えた。後、馬融は『周官伝』を作り、鄭玄に授け、玄は『周官注』を作った。玄はもと『小戴礼』（錢大昕は、この『小戴礼』は今の『儀礼』を指すという。）を習ったが、後古文の経でそれを校勘し、その義の優れるものを取った。こうして、鄭氏の学が完成した。玄はまた小戴が伝えた『礼記』四十九篇に注を付け、まとめて『三礼』とした。

【春秋】

『漢書』に「斉の胡毋子都は『公羊春秋』を伝え、東平嬴公に授け、嬴公は東海の孟卿に授け、孟卿は魯人の眭孟に授け、眭孟は東海の嚴彭祖と魯人の顔

安楽とに授けた。彭祖は春秋嚴氏学をなし、安楽は春秋顔氏学をなした。また瑕丘の江公は『穀梁春秋』を伝え、三家はみな博士に立てられた。梁の太傅の賈誼は『春秋左氏伝訓詁』を作り、趙人の貫公に授けた」とある（『漢書』儒林伝では、孟卿と眭孟とは師弟関係ではなく、嬴公の弟子として並列されている。）。

丁恭、字は子然、山陽東緡（山東省）の人。『公羊嚴氏春秋』を習う。恭は経書の内容理解に明らかで、教授するところは常に数百人いた。州郡が召し出そうとしたが応じなかつた。建武の初め、諫議大夫・博士となり、関内侯に封ぜられた。十一年（三五）、少府に遷った。諸生で遠くから至る者は記録されているだけで数千人に上り、世間では大儒と称せられた。太常の樓望・侍中の承宮・長水の校尉の樓倫らは、みな業を恭に受けた。二十年、侍中の祭酒・騎都尉に任命され、侍中劉昆とともに光武帝の側にあり、事に意見を尋ねられた。在職中に亡くなった。

周沢、字は穉都、北海安丘（山東省）の人。若くして『公羊嚴氏春秋』を習い、隠居して教授し、門下生は常に数百人を教えた。建武の末に大司馬府に召され、議曹（郡主の属吏。祭酒に配属された。数カ月後、召し出され博士の試験を受けた（に試された）。中元元年（五六）、睢池令に遷った。滅私奉公し、弱者に憐れみ深く、吏人に慕われた。永平五年（六二）、右中郎将に遷った。十年（六七）太常（宗廟の礼儀を司る）に召された。

沢は直言をはばからず、しばしば執拗に諫言した。後、北地の太守廖信が収賄に座し獄に下り、財産を没収された。顕宗（明帝）は信の贓物（不正により入手した物）を清廉な官吏に分け与えた。沢と光祿勳の孫堪・大司農の常沖は特別に下賜された。この時、都中が沸き立ち、位にある者は一斉に精励するようになった。

堪、字は子穉、河南緡氏（河南省）の人。経学に明るく、節操もあり、清廉潔白で、士大夫を慈しんだ。だが、一毫たりとも人から物を貰うことなく、節度と気概とを實行した。王莽の末、あちこちで兵乱が起こったが、宗族老弱は皆の中にいて、自分は常に力戦して敵を陥れ、敵に後ろを見せることがなく、しばしば刀傷を負った。宗族は彼を頼みとし、郡中はみなその義勇に感服した。建武年間、郡県に仕えた。公正にして清廉潔白で、奉禄は妻子に及ばず、み

な賓客に供された。長吏となるに及び、各地で功績を挙げ、吏人に敬仰された。去就はあつさりしていた。かつて県令になり役所に詣でた(注 漢の制度では、県令に任命されると、まず役所に詣でることになっていた。)が、足どりが緩慢なため、門亭の長が御吏に彼のことを悪く言った。すると、堪は印綬を解いて去り、官に就かなかつた。後、また仕えて左馮翊(地名)を治めたが、部下に敵しすぎた廉で、司隸校尉は「彼を」免官しよう上奏した。数カ月後、召されて侍御史となり、さらに尚書令に遷った。永平十一年(六八)光祿勳に任命された。

堪は清廉で、敢然と政治に従事し、しばしば直言し、多く採用された。十八年(七五)病気のため退職を希望したが、侍中騎都尉となり、在職中に亡くなつた。堪の行いは沢と似ていたので、都では「二釋」と呼んだ。

十二年(六八)、沢に司徒の仕事を行わせたが①、本職と変わらぬ働きをした。沢はおおまかな性格で、威儀をなおさりにし、宰相を失望させた。数カ月後、また太常(宗廟を司る)になった。行いを清潔にし、宗廟を厚く敬った。

かつて病気で齋宮に臥せたが、その妻が沢の老病を心配し哀れみ、病状を尋ねに行つた。すると、沢は激怒し、妻を齋の禁を犯したとして獄に送り取り調べを受けさせ謝罪した。世間はその過激さを恐れた。当時の人はこれを「世に生まれて諳わず、太常の妻となり、一年三百六十日、三百五十九日齋す。」と言つた②。十八年(七五)侍中騎都尉に召された。後、しばしば三老五更(長老の職)になり、建初年間に退職し、在野で一生活を終えた。

①賈延が免官されて邢穆が就任するまでの間のことである。

②李白「贈内」詩に、この話を取り上げられている。三百六十日 日々醉

如泥 雖為李白婦 何異太常妻

鐘興、字は次文、汝南・汝陽(河南省)の人。若いころ少府の丁恭(前出)について『蔽氏春秋』を学んだ。恭が興は学問、行動ともに優れると推薦したため、光武帝は召しだして、経書の意義を問うた。興の応対は甚だ明瞭で、皇帝はよしとして郎中の官(皇帝近侍の官)を授けた。しばらくして左中郎将(宿衛侍直の官)となった。詔により『春秋』の章句(注釈の一種)を定め、重複を取りさつて、皇太子①に授けた。また「皇帝の命により」皇族の諸侯は興について章句を学び、「興は」関内侯(爵名、称号のみで実封はない)の位を授かった。「しかし」興は自分にはそれだけの功績が無いとして、爵位を受けよ

うとしなかつた。皇帝はいった。「先生は太子や王族、諸侯に教えておられる。大きな功績ではないか」と。興は、「臣の師匠は丁恭でございます」と。そこで恭にも爵位を与えることとしたが、興は最後まで固辞して爵位を受けなかつた。在職中に亡くなつた。

①光武帝は即位翌年の建武二年六月に、貴人・郭氏を皇后にたて、その子の彊を皇太子とした。のち建武十七年十月、皇后は廃され、貴人・陰氏があらたに皇后位についた。翌々年の建武十九年六月詔して、陰皇后の子、第四子の東海王陽が彊にかわつて皇太子となつた。これがのちの明帝である。

甄宇、字は長文、北海・安丘(山東省)の人。もの静かで欲のない人物であつた。『蔽氏春秋』を学び、常に数百人も学生に教授した。建武年間(光武帝二五〇五〇)に州の従事(県の長官である刺史の補佐)となり、「ついで朝廷より」博士の官を授けられた。ややあつて太子少傅(太子の教育係)となり、在職中に亡くなつた。

子の普に学業を伝え、普は子の承に伝えた。承は非常に学業熱心で、私事にはいっさいかかずらわず、常に数百人も学生に講義をしていた。承が三代にわたる学問の家系であるため、儒者たちで心服しないものはなかつた。建初年間(章帝七六〇八四)に考廉(選挙科目の一、次代の和帝より人口比にて合格者の人数を定めた。)に推挙され、梁相(梁は県名、河南尹いまの河南省・臨汝県に属す。王朝の重要拠点である。相は郡守や県令をいう)で亡くなつた。子孫は絶えることなく学業を伝えていった。

樓望①、字は次子、陳留・雍丘(河南省)の人。若いころ『蔽氏春秋』を学んだ。節操があり清廉な人物で、郷里で評判であつた。建武年間(光武帝二五〇五〇)に、趙の節王の掾(巻十四に伝あり)はその高名を聞き、玉帛をおくつて、師匠となることを乞うたが、望は受けとらなかつた。のち郡の功曹(郡守や県令の補佐で、補佐役中の最高位)に仕えた。永平(明帝 五八〇七五)の初め、侍中(皇帝近侍の官)・越騎校尉(越騎は京師の常備軍の一。校尉は將軍に次ぐ位で、宿衛兵を統べる)となり、入内して宮中にて学問を講じた。十六年(七三)、大司農(国家の財政を司る)となり、十八年(七五)、周沢(前出)に代わつて太常(宗廟の祭祀や儀礼を司る。百官中の最高位である)となつた。建初五年(八〇)、ある事件に連座して太中大夫(皇帝の参謀、願

問の官)に遷され、のち左中郎将(宿衛侍直の官)となった。「こうした転変のあいだも学問を」教授することをやめず、世に儒宗と称えられた。学生数は記録されているだけで九千人余りにもなる。年八十、永元十二年(一〇〇)、在職中に亡くなった。葬儀に集まった門生は数千人に及び、儒者たちは榮えあることと称賛した。

①前出の丁恭伝に樓望の名がみえる。また卷二十七丁鴻伝では、肅宗の命により、白虎観で五經の同異を論定したとある。

程曾、字は秀升、豫章・南昌(江西省)の人。長安で学問をおさめ、『嚴氏春秋』を学ぶこと十余年で、故郷に帰り学を講じた。会稽(江蘇省)の顧奉①をはじめ、数百人が常に門下につどっていた。著書は数百篇、みな五經の難解な箇所を明らかにしたものであり、また『孟子章句』をあらわした。建初三年(七八)、孝廉(選挙科目の一つ)に推挙され、海西(江蘇省)の令(大県の長官)となり、在職中に亡くなった。

①会稽の顧奉は伝がたてられていないが、卷三六・張覇伝に覇が会稽の処士であつた奉を登用し、奉はのちに潁川太守となつたと記されている。なお張覇は『嚴氏公羊春秋』をおさめたほか、五經に博通したという。

張玄、字は君夏、河内・河陽(河南省)の人。若いころ『顔氏春秋』を学び、あわせて数家の学問に通曉した。建武(光武帝・三五―五六)の初め、明經(選挙科目の一つ)に推挙されて、弘農(河南省西部・陕西省にかけての地名)の文学(郡にあつて学問を司る官)にあてられ、陳倉県(陕西省)の丞(県の長官の補佐、文書を司る)にかわつた。清潔無欲な人物で経書に専心し、講義になると、一日中食事をとらなかつた。難解な箇所があれば、いつでも数家の説を述べひろげて、落ち着きのよい説を「学生に」撰ばせた。儒者たちは、彼の博通に感服し、記録されている学生数は千人にものぼつた。

玄はかつて県の丞であつたとき、職務のため官庁を訪れたが、役所の所在を知らなかつた。役人は門下(門下掾、州郡の長官の属官)に申しあげて玄を叱責した。そのころ右扶風(三輔の一、陕西省)にいた瑯邪(山東省)の徐業①も大儒であつた。徐は玄の学生たちから師の評判をきいたので、試しに玄をまねいてみた。語りあうや、徐は非常に驚いていった。「今日お会いして、本当に目が開かれた思ひです」と。かくて堂に上がるようお願い、終日、議論しあつ

た。

のちに玄は官を辞したが、孝廉に推挙されて召されて郎(皇帝侍從官の通称)となつた。たまたま顔氏博士に欠員があり、「任官試験をしたところ」玄の答案がもつとも優れていたため、玄に博士の官を授けた。数ヶ月ほどして、学生たちは皇帝に申しあげた。玄は嚴氏、冥氏の学にも通じております。顔氏だけの博士とするのは適当ではございません、と。光武帝はさらに「他博士を」兼任させようとしたが、異動するまえに亡くなつた。

①徐業は『後漢書』中、ここにしか記述がみえない。

李育、字は元春、扶風・漆(陕西省)の人。若いころ『公羊春秋』を学んだ。精神を研ぎ澄ませ深くもの思う人物で、書物を博覧した。太学にその名を知られ、同郡出身の班固(卷四〇上に伝あり)にたいそう重んぜられた。固は奏記をたてまつつて①育を驃騎將軍(非常の官、軍務を司る。東王平の蒼は王であるので、驃騎將軍の位は公より上とされた。後に罷めた)の東平王の蒼(卷四二に伝あり)に推薦し、これより都の貴族たちは争つて育との交際を求めようになつた。州郡が招請すると、育はその地へ到着しては、いつも病氣と称してよそへ去つた。

常に各地を転々としては学を教授し、門徒は数百人におよんだ。古文学を渉猟することふかく、以前『左氏伝』を読み、その文章を楽しみはしたものの、聖人の深意を表したのではないといつた。李は考えた。先人陳元、范升②の一派は互いの説を非難しあつていたが、「その説には」図讖をたくさん引いており、道理に基づいていかなかったと。そこで『難左氏義』四十一事を作つた。

建初元年(七六)に、衛尉(宮中の巡回警邏を司る)の馬廖(卷二四に伝あり)は育を方正(選挙科目の一つ)に推薦したため、議郎(非常の官、郎中令の属官で顧問應對を司る)となつた。のちに博士を授けられた。四年(七九)に、詔あつて儒者たちと白虎観にて五經を論じ、育は公羊の義によつて賈逵(卷二六に伝あり。左氏を奉じた)の説をやりこめた。応答はみな道理に依拠し、最高の通儒とされた。

ふたたび転任して尚書令(選署文書をはじめ尚書の職掌全般を統括する)となつたが③、馬廖が失脚すると④、連座して罷免され「故郷に」帰つた。一年余りでまた召しだされて、侍中となり、在職中に亡くなつた。

①班固の奏記は伝に収められている。また卷三五・鄭玄伝に范升、陳元、李

育、賈逵らが古今の学について論争したとみえる。

②両者とも卷三六に伝がある。陳元と范升との論争はそれぞれの伝に具に録されている。発端は左氏博士を立てるか否かであった。

③李育が尚書令であったのは明帝紀によれば中元二年四月から同五年二月までのことである。

④馬廖失脚の一件は子の豫との確執に端を発し、建初八年に官を解かれて故郷に帰った。

何休、字は邵公、任城・樊（山東省）の人。父の豹は、少府（宮中の衣服珍宝を司る）であった。休は質朴、寡黙な人物で、いつも心がけて六経の研鑽を積み、世間の儒者でも彼に及ぶ者はいなかった。「そこで皇帝は何を尊位である」卿子につらね、詔して郎中を授けた。望むところでないため、「何は病氣と称して辞退し、州や郡に仕えることもしなかった。その出処進退は必ず礼に基づいていた。

太傅（皇帝補佐の高位の官）の陳蕃（卷六六に伝あり）が何を辟召し①、政事に参与することとなったが、蕃が「党争に」敗れると、休も連座して任官資格剥奪処分とされた。そこで『春秋公羊解詁』を作り、ふかく思いをめぐらして家から出ないことが十七年あまりにもなった。又『孝経』『論語』『風角七分』②に訳注をほどこすさい聖人の書をおさめて、自家の説を墨守する学者たちには同調しなかった。又『春秋』の意によって漢代の六百余りの事柄の是非を論じ、よく公羊の本意を発揮していた。休は計算や曆法を得意とし、師匠の博士・羊弼③と李育の意を祖述して、「左氏、穀梁の」一説を批判し、『公羊墨守』『左氏膏肓』『穀梁廢疾』を作った。

資格剥奪処分が解除されると、又召されて司徒（三公の一、教化を司る）となった。公たちは上奏していった。休の道術は深淵明晰で、「皇帝の」参謀となるべきであります、と。佞臣が反対したため、議郎を授かることとなり、休はしばしば忠言をたてまつった。そして諫議大夫（顧問應對を司る）となり、五十四歳で光和五年（一八二）に亡くなった。

①陳蕃が太傅になったのは、本伝によれば永康元年（一六七）のことである。

②『風角七分』については未詳。

③羊弼はここ以外では『後漢書』に記載なし。

服虔、字は子慎、はじめは重と名のり、また祗と名のり、後には虔と改名した。河南・滎陽（河南省）の人。若いころ、清廉だが貧しい生活のなかに志をたて、太学に入つて学問を受けた。すぐれた才能をもち、文章が上手だった。その『春秋左氏伝解』は今でも通行している。又『左伝』によって何休が是非を論じた漢の事柄六十條をさらに論じた。孝廉に推挙され、しばらくして異動あり、中平年間（靈帝 一八四〜一八九）の末、九江（安徽省）の太守を授けられた。『同職を』解任されると世の動乱に遭い、各地を転々し、病にかかり亡くなった。著作は賦・碑・誄・書記・連珠・九憤①、全部で十余篇ある。

①賦・碑・誄・書記・連珠は文章のジャンルである。九憤はジャンルか作品名か未詳。

穎容、字は子嚴、陳国・長平（河南省）の人。博学でいろいろな学説に通じ、とりわけ『春秋左氏』に詳しかった。太尉の楊賜（卷五四に伝あり）に師事した①。郡が孝廉に推挙し、州が招致し、公車が迎えにきて、いずれにも就任しなかった。初平年間（獻帝・一九〇〜一九三）に、世の混乱を避けて荊州（湖北省）にゆくと、あつまった学生は千人余りであった。「刺史の」劉表（卷七四下に伝あり）が武陵（郡名、湖南省）の太守に任命したが②、応じようとしなかった。『春秋左氏條例』五万余言をあらわし、建安年間（獻帝・一九六〜二二〇）に亡くなった。

①楊賜が太尉となったのは本伝によれば熹平五年（一七六）のことである。

楊家は父祖の代より歐陽尚書を奉じる一家である。

②劉表が荊州刺史となったのは本伝によれば初平元年（一九〇）のことである。

謝劭、字は文儀、南陽・章陵（湖北省）の人。『春秋左氏伝』を良く理解して世の名儒とされ、その門に学ぶ者は数百人もいた。建安年間（獻帝 一九六〜二二〇）に河東郡（山東省）の樂詳が『左氏伝』における疑問数十事を簡条書きにして謝劭に尋ねたところ、彼は前後を矛盾なく解釈してやった①。それは『謝氏釈』と名づけられ世に広まった。公車司馬令（宮中の護衛を司る衛尉の属官）として仕えたが、父母が老いたので、病氣を理由に官職を去り、郷里に帰ろうとした。おりしも後漢木の混乱で荊州（湖南・湖北一帯）への道が断たれて行くことができなかつた。少府（宮中の物品・財宝を管理する官）の孔

融は上書し彼を推薦して言った。「臣が聞きますに、高祖が漢朝をはじめお建てになられた時には韓信や彭越らの武將が暴乱を攻め、また陸賈や叔孫通らの儒者は御前に進み出て『詩』『書』を説きました。光武帝が漢朝を中興なされた時には呉漢や耿純らの功臣が光武帝の受けた天命の実現を補佐し、また范升や衛宏らの学者は古から受け継がれてきた学問を身に付けて後の世に伝えました。だからこそ文も武も共に用いられて国家長久の計画を成すことができたのです。陛下の聖徳が慎み深く且つ知恵明らかなること、高祖・光武帝の二祖と異なりません。先帝（靈帝）の喪に巡り合わせて憂い慎んでこられました。三年の喪も明けて臣民は喜んでおります。今や尚父（呂尚）の軍が鷹の飛び揚がるようであった如く②、方叔の軍が隼の高く飛ぶようであった如く③、陛下の軍隊は雷電のように征討して諸々の悪人たちは破滅され、ようやく弓を収め陣太鼓を横にして武器を用いる必要の無い時が巡ってまいりました。どうか名儒をとりたてて礼の規範を取り仕切らせませう。ひそかに思っていますに、公車司馬司の謝該は曾參や史魚のような素晴らしい性質を身に付け④、卜商（字は子夏）や言偃（字は子游）のように優れた学問の才能を合わせ持ち⑤、広く様々な学芸に通じ、あまねく古今の書を読み、物が来ればそれに応じ、事が至れば感うことなく、清廉潔白で優れた行いを身に備え、道徳の教えを敬い喜ぶ者であります。このような人物をあちらこちらと捜し求めたとて彼に匹敵する者はめつたにありません。呉に巨大な骨が現れたとか⑥、隼が陳国の宮殿の庭に集まったとか⑦、夢に黄色い熊が寝門に入ってきたとか⑧、亥には二の頭があるとか⑨、このような場合には彼のような博識の者でなければ手がかりを知ることとはできません。僞不疑は宮殿の北門の前で皆が決しかねる案件に対して経術を依りどころに裁断を下し⑩、夏侯勝は曇り続きの天候が何の予兆であるかを経術に依って説き明かし⑪、それから朝廷に仕える者達は益々儒術を重んずるようになりました。ときに謝該は実に群を抜いて優れ、昔の優れた人々に比肩し得る者です。近頃その父母が老い病んでいるからと官職を捨て帰郷しようとしておりますが、道路が険しく塞がれていて帰る手だてを失っております。よくよくお考えにもならず、良才才能の持ち主に秘めた資質を發揮させぬまま立ち去らせ、山河を越えて荆楚の地に埋もれさせてしまつては、所謂「（山林の士は）往きて返らず」⑫でございます。後日きつと秦の繆公が戎王に女樂を贈つて賢人の由余を求め⑬、殷の高宗が夢に見た賢人の傳説の姿を刻ませてを捜した⑭ように彼を捜すことになるでしょうが、なんと煩わしいこと

ではありませんか。臣愚は思いますに、彼の居所を尋ねて記しておいて後に彼を召し戻したらよいでしょう。荀子が国を去るのを楚の春申君が引き留めたのも⑮、漢の朝廷が平原の文学であった匡衡を召し出したのも⑯、儒者を尊び學術を重んじ賢人を失うのを残念に思つたからです。」意見書が上奏されると、詔が下されてすぐに召し返され議郎に任ぜられた。寿命を全うして死んだ。

①『三國志』魏書・杜畿伝注所引『魏略』にも見える。楽詳に『左氏樂氏問七十二事』の著あつたという。

②『詩経』大雅・大明に呂尚が周の武王を助け殷を討つた様子を「維（二）れ師尚父、時（二）れ維（二）れ鷹のごとく揚がり、彼の武王を涼（たす）け、肆（ほし）いままに大商を伐ち」と述べる。

③『詩経』小雅・采芣に、方叔が宣王に派遣されて荆蛮を討つた様子を「飲（はや）き彼の飛ぶ隼、其れ飛んで天に戻（いた）り」と述べる。李富孫『詩経異文釈』は、「其飛く其れ飛んで」は六朝・唐には皆「翰飛く翰（たか）く飛んで」に作つたという。

④曾參は孔子の弟子、『孝経』の著者と伝える。史魚は衛国の大夫、『論語』衛靈公篇に「直なるかな、史魚」と評し、正直な人物で知られる。

⑤『論語』先進篇に、孔門の十哲中「文学は子游・子夏」と評される。

⑥『史記』孔子世家。呉が越の都の会稽を破壊したとき車一杯ほどもある巨大な骨が出土した。呉の使いが孔子に尋ねると、孔子は即座にそれは禹に殺された防風氏の骨だと答えた。

⑦『史記』孔子世家。陳国の宮庭に隼が集まり矢に貫かれて死んでいた。陳公が孔子に尋ねると、その矢は周の武王の時に肅慎国が奉つた矢で、陳国にも伝わっていると答えた。

⑧『春秋左氏伝』昭公七年。晋侯は病み付いて黄色い熊が寝門に入る夢を見るところであった。それを聞いた鄭国の子産は、「堯に殺された鯀の魂は黄熊となった。夏・殷・周はこれを祭ってきた。盟主たる晋は祭っていないのではないか」と答えた。祭ると晋侯は癒えた。

⑨『春秋左氏伝』襄公三十年。晋国に労役に従う老人があつた。年齢は七十三歳らしい。大史の史趙が「亥」の字（老人の名か）を手がかりに「亥は二の頭と六の体がある（亥の字は「二」を表す第一・二画と「六」を表す三つの部分とに分解できるという）、これがこの老人の生きた日数を表している（二万六千六百六十日で七十三歳の年齢に合う）」と言つた。

⑩『漢書』僞不疑伝。昭帝の始元五年（前八二年）衛太子と名乗る男が北門に現れた。衛太子とは先帝武帝を呪い殺そうとしたかどで罪せられ挙兵し、後に自殺した先の皇太子。丞相・御史もその男の処分を決せられぬなか、僞不疑は『春秋公羊伝』（哀公三年）に基づき罪人であると裁いた。昭帝・大将軍霍光は「公卿大臣は当に経術を用いて大誼を明らかにすべし」と褒めた。

⑪『漢書』夏侯勝伝・五行志。昭帝が崩じ、武帝の孫の昌邑王賀が後継となつたが品行悪く、大将軍霍光らはこれを廃さんと計画した。『洪範五行伝』に「君主がまともでない」と、曇り続きで、下位が上位を討つこともある」とあるのに基づいて、夏侯勝が昌邑王を諫めていたと知つた霍光は驚いて益々経術の士を重んじるようになった。

⑫『韓詩外伝』巻五。「朝廷の士は禄の為にす、故に入りて出でず。山林の士は名の為にす、故に往きて返らず」とある。

⑬『史記』秦本紀。戎王は由余を秦に使ひさせ国情を探つた。由余が賢者だと知つた秦の繆公は戎王に女楽を贈つて感寄せ、由余を引き留めて、彼の君臣の間を割き、由余は秦に身を寄せた。

⑭『帝王世紀』。殷の高宗武丁は天が傳説なる賢人を賜うのを夢に見た。武丁は百工に傳説の形象を写させて天下中を捜した。

⑮『戦国策』楚策。荀子を一旦召し抱えながら手放してしまつた楚の春申君は、食客に「賢者をもつ君は尊く国は栄える。賢者荀子を何故去らせたのか」と言われ、再び荀子を召した。

⑯『漢書』匡衡伝。元帝の外戚の史高は高位にあつたが、名声は蕭望之に及ばない。長安令の楊興は史高に、賢者を求めよと説き、才知豊かで経学に優れた匡衡を平原から召すよう勧めた。

建武年間（二五～五六）鄭興・陳元らは春秋左氏学を伝えていた。おりしも尚書令の韓歆は上書して、左氏学に博士を設けようとした。范升はそれに反対して韓歆と論争して決着が付かなかつた①。陳元は上書して左氏の学の正当性を訴えた。こうして魏郡（河北省）の李封を左氏博士とした。その後、多くの儒者の頑なな者がしばしば朝廷にて左氏学を学官に立てるべきではないと争つた。李封が死ぬと、光武帝は衆議に反すべきではないと考えて左氏博士の補任は行わなかつた②。

①『後漢書』范升伝に見える。
②『後漢書』陳元伝に見える。

許慎、字は叔重、汝南・召陵（河南省）の人。性質は純朴誠実で若くして博く経籍を学んだ。馬融は常々彼を尊敬し、当時の人々は「五経無双の許叔重」と評判した。郡の功曹となり、孝廉に推挙され、一度昇進して汝南の県令に任ぜられた。家で亡くなつた。以前、五経の解釈において良し悪しが一定しないので、そこで『五経異議』を著し解釈の違いを論じた。そのほかに『説文解字』十四篇を著した。ともに世に伝わつた。

蔡玄、字は叔陵、汝南・南頓（河南省）の人。学問は五経に通じ、彼の門に学ぶ者は常に千人、名簿に記録されている者は一万六千人にもなつた。「州郡に」召されたがいずれにも就任しなかつた。順帝（在位二二五～二四四）はわざわざ詔して召し出し議郎に任命した。五経の解釈の異同を論ずればとてもよく皇帝の御意に適つた。侍中に移り、地方官として出て弘農（河南省一帯）の太守となり任中に亡くなつた。

論に言う。光武帝の中期以後に戦乱が収まり①、人々はおつぱら経学に従事するようになった。これ以来その風潮は世を重ねるにつれ強まつていった。儒服を身につけ先王を称え庠序（学校）に学び黌塾（学校）に集まる者は全国に広まつた。そして博士のいる所には万里の道のりも遠しとせずによつて来た。学舎が次々に建てられると食料を担つてやってくる者が千百にも達した。名高き行いに優れた老師が門戸を開き弟子を受け入れるや名簿に名を連ねる者は万人をくだらなかつた。彼らは皆ひたすら師説に法りそれを伝えて誤り乱すことはなかつた。後には、朝廷では学派に別れて説を争ひ、郷里では徒党を組み、一章一条の解釈を煩雑にし、穿鑿して無理に理屈をつけて、そうして自学派の説に合致させようとするようになった。だから楊雄は言うのである、「今の学者はただ衣服に美しい模様を施すだけでなく、そのうえに腰につけるハンカチ袋にまで刺繍をする（訓解がなされてい上に更に細々と解説を加える）」②と。そもそも書物に記された道理は唯一無二、義理のおちつくところには一つの根本が有るのである。しかるに碩学と言われる人々は（自説に固執して）自説を移すことが無い。だから何事にも通じた才人は彼らの固陋を見下すので

ある。これもまた楊雄の言う「譎譎（ぎようぎよう）」と云い争う学者もそれぞれその師法に泥んでのこと」③である。且つ、名を挙げ優秀な成績で官吏に合格した者を見ても、最後に学問の蘊奥を究めた者は恐らくこれもまた少なからう。滞って役に立たないことこの有り様である。しかし彼らが講じたのは仁義であり、伝えたのは聖人の教えであった。だから人々は君臣父子の規範を知り、家々は邪を改め正しきに帰る道を知っていた。

桓帝より靈帝にかけての時代（一四六～一八九）から、君主の政道は衰退し、朝廷の秩序は日に日にすたれ、郡国内の不和はたびたび生じて、中智より以下の凡才でさえ国家の崩壊分裂をさとらない者はなかった。さりながら権勢をもつ臣下でも政権を簞奪する謀略をうけつけず、豪傑といわれる人でも一介の学者の意見に従ったのは④、人々が先王の言葉を唱えたからであり、人品卑しき者さえ道理に逆らうことになるのを畏れたからである。例えば張温⑤や皇甫嵩⑥らは、功績は天下の半分を平定し、名声は国中に知れ渡り、容易に漢王朝に取って代われたのに、依然として暗君の下で身を屈し、折札（半分に折られた札）に記された短い命令にも慌てふためいて従い、大軍を各地に率い、「果ては」繩目にかかり、それでも後悔しなかった。弱体化した漢王朝が自壊して漢の人も神も命運が尽きると、その後群雄が漢王朝の衰退につけこみ、代々に徳を積んできた漢王朝も帝位が絶えることとなった。その衰退の由来をたずねるに、長い歳月を持ちこたえられたのは、どうして学問の功徳でないと云えようか。故に、先師が經典の文を伝えて学者を褒め励ました功績は、なんと厚きことよ切なることよ。『春秋』に従わないで殺害反逆に匹敵するほどの罪を犯すに至るのは、そもそも罪を犯そうとの意志が有つてのことであろうか（『春秋』に従わない当然の結果である）。

①光武帝による統一が成るのは建武十二年（三十七）。

②『法言』寡見篇。李賢注は原文の「鑿」を「大帯」とするが、汪榮寶『法言義疏』に従い「手拭きを入れる袋」とする。

③『法言』寡見篇。『法言義疏』に「譎譎」は「争語の声」という。なお、寡見篇のこの一節は、或る人の「天下は言い争う学者の説にあふれている。どこに聖人の教えが在るのか。」との問に対する楊雄の回答、すなわち「言い争っている学者もそれぞれ其の師法を習つてのこと、その師法を瀕り吟味を加えてゆけばそこに聖人の教えが在る」に見えるもので、楊雄は（師法を習う）ことを否定的に述べてはいない。

④李賢注は「權彊之臣」に皇甫嵩を、「豪俊之夫」に董卓を充てる。それに對して、黄山『後漢書集解校補』は、皇甫嵩を「權彊」とは言えず、また董卓のことは靈帝の時ではない（靈帝の死後）、ここは特定の人物を指すのではなく、權威重き外戚も帝位を奪えず、専横な宦官も清議によつて誅された事などを概説したものだという。

⑤『後漢書』董卓伝などに散見。靈帝の時、黄巾の乱などの反乱の鎮圧に功績があつた。董卓に憎まれ、獻帝の初平二年（一九一）に誣告され殺された。

⑥『後漢書』皇甫嵩伝。靈帝の時、黄巾の乱などの鎮圧に武功を挙げた忠臣。董卓に憎まれ、初平元年（一九〇）城門校尉として召された際、董卓に殺されると察しつづ召しに応じて捕らえられたが、董卓と親しかった子の堅寿の譴責により救われた。

贊に言う。儒学は未だ廃れず学者たちはそれぞれ学問を継承しているが、諸流各派に分かれて専門が並び立つ状態になった。精密な学と粗略な学とは結論を異にし、学に通じた者と暗い者とは互いに言い争つた。千年に一人の聖人が現れないなら混濁した学問の淵源を誰が澄ませるのだろうか。

一九九七年四月十日受理

* 一般教養科

** 四天王寺国際仏教大学講師

*** 梅花短期大学非常勤講師

**** 大阪大学大学院博士後期課程